

丈草百句

内藤丈草著

911.33

N29

911.33-N29ㄅ



1200500756154



始



丈草百句

917

8

Q11.33
N 29



百
句



限定壹百部之内
第 納 本 册

917
8



大
學
印

大原や蝶の出て舞ふ朧月

はるさめやぬけ出たままの夜着の穴

春雨や何からいはん嗟峨戻り

木枕の垢や伊吹に残る雪

見送りの先に立けりつくづくし

我事と鯀の逃げし根芹かな

花曇り田螺のあとや水の底

水壺にうつるや花の人出入

片尻は岩にかけたり花筵

山がらは花見もどりや枕もと

夕ばへや花の波こすあらつ、み

死んだとも留守ともしれず庵の花

木啄や枯木をさがす花の中

眞先に見し枝ならん散るさくら

うぐひすや茶の木畑の朝月夜

朝ごとに同じひばりか屋根の空

松風の空や雲雀の舞別れ

歸る空なくてや夜半のやもめ雁

松風をうちこして聞く蛙かな

白妙に月夜鳥や花の奥

何の葉の影ぞねちむく雉子のてり

さし覗く窓へつつじの日足かな

夏

町中の山や五月の上り雲

十四

屋の棟の麥や穂に出て夕日影

時鳥啼くや湖水のささ濁り

ほと、ぎす瀧より上のわたりかな

十五

菜種がら焚や野風の子規

呼聲は絶へてほたるのさかりかな

螢火や蟹のあらせし庵のへり

雨乞に先立つけふややぶれ笠

朝日さす紙帳のうちや蚊の迷ひ

十八

夕立のかしら入たる梅雨かな

夕立に走り下るや竹の蟻

火をうてば軒に鳴きあふ雨がへる

十九

松風を中に青田の戦ぎかな

夕ばえや茂みにもるる川の音

電のさそひ出してや火とり虫

涼しさを見せてやうごく城の松

秋

蚊帳を出て又障子あり夏の月

涼しさに寝よとや岩のくぼたまり

稻妻のわれて落るや山の上

旅瘦を見には寄らぬに秋の池

伊賀へ赴く、時芭蕉翁墓に詣で、
言傳も此通りかや墓の露

乙州が袂にして歸る小貝は翁の拾はれしよりも細かなりければ
老眼にもるる小貝や秋の霜

送火の山へのぼるや家の數

二十六

旅中

蜻蛉の來ては蠅とる笠の内

早稻の香や雇ひ出さるゝ庵の舟

棒の手の同じさまなる案山子かな

二十七

大佛をさがる別れや秋の風

松の葉の地に立並ぶ秋の雨

素覽亭

枕出せ裏屋に廻る秋の雲

ねばりなき空に走るや秋の雲

野山にもつかで晝から月の客

豆麩賣る聲は籠の月夜かな

名月や塩津海津の走り船

しら濱や犬吠かかる今日の月

草庵の弱りはじめや秋の蠅

借かけし庵の噂や今日の菊

連のある所へ掃くぞきりぐす

病 床

虫の音の中に咳き出す寢覺かな

藁焚けば灰によごるゝいとどかな

歸り來る魚の栖すまや崩れ築

ぬけ殻に並びて死ぬる秋の蟬

行秋の四五日弱る芒かな

行秋や梢にかゝる匏屑

三十六

北嵯峨や町を打越す鹿の聲

鹿ずれの松の光るや夕月夜

月しろやしぐれの中の虫の聲

三十七

雷落し松はかれ野の初しぐれ

屋根葺の海をふりむく時雨かな

黒みけり沖の時雨の行處

幾人かしぐれかけぬく瀬田の橋

はつ霜の泥によごれつ草の色

朝霜や茶の湯の後のくすり鍋

船待の笠にためたる落葉かな

病人と鉦木に寝たる夜寒かな

猪の静かな年や粟畠

釣柿や障子に狂ふ夕日影

冬

うづくまる薬の下の寒さかな

風のあたり處やとぶ柳

雲冷ゆる夜半に低し雁の聲

夜話の長さを行けばどこの山

飛かへる岩のあられや窓のうち

淋しさの底ぬけて降るみぞれかな

煤掃や山風うけて吹通し

行燈を消せば鼠の年忘

着て立てば夜の衾もなかりけり

うら門の竹にひゞくや鉢たたき

霜腹の寝ざめくや鴨の聲

狐なく岡の晝間や雪曇り

しまき來る雪の黒みや雲の間

さかまくやふりつむ峰の雪の雲

柴の戸や夜の間到我を雪の客

槽の火や曉がたの五六尺

雪よりも寒し白髪に冬の月

背戸口の入江に上る千鳥かな

水底を見て来た顔の小鴨かな

鶏の片足づつや冬ごもり

影法師の横になりたる火燧かな

水底の岩に落つく木の葉かな

誌

丈草。尾州犬山の藩士。寛文二年出生。二十五歳、家を異母弟に譲り、熊野山先聖寺玉堂和尚に修し、大忘軒と號した。多年負_レ屋一蝸牛。化_レ倣_二帖_一愉_二得_二自由_一。火宅最惶誕沫盡。偶尋_二法_一雨_一入_二林_一丘_一。は彼が遁世の所懐だといふ。後、芭蕉に従つて俳諧に遊んだ。江州粟津龍岡に草庵を結んで、佛幻庵と稱し、懶窩道人を號して、一生を花月に盡した。寶永二年二月二十四日示寂四十五歳。

917
8

製本控

917 函 8 號

文草百回

内藤文草

年 月 日

冊

備考

昭和八年八月十四日



草木屋出版部刊

終

